

日本における「デイサービス」と「デイケア」研究の動向（看護学科開設10周年記念特別号 総説・論説）

著者	太田 節子, 田中 小百合
雑誌名	滋賀医科大学看護学ジャーナル
巻	3
号	1
ページ	4-6
発行年	2005-02-20
URL	http://hdl.handle.net/10422/872

日本における「デイサービス」と「デイケア」研究の動向

太田節子 田中小百合

臨床看護学講座

要旨

介護保険制度導入前後における「デイサービス」と「デイケア」に関する過去の文献を検討して、高齢者と家族を支える今後の研究に必要な課題を明らかにすることを目的に、医中誌 WEB 版、1990～2002 年に収録された「原著」の文献を検索した。1 文献 1 テーマとして、「デイサービス」「デイケア」別に検索文献を整理・分類し、KJ 法の手法を用いて「デイサービス」および「デイケア」の特徴を明確化した。その結果、総文献数は 353 件で、「デイサービス」108 件 (30.6%)、「デイケア」245 件 (69.4%) であり、どの年も「デイケア」の文献が多かった。KJ 法で取り出された特徴は 8 項目で、①活動内容 ②サービスの評価と意義 ③看護職の役割 ④利用者の多様性とサービスの意義 ⑤医療的処置の実情 ⑥介護負担の軽減 ⑦看護教育への貢献 ⑧利用者の満足感・QOL と感染・転倒等の利用を障害する要因であった。今後は、サービスの有効性を系統的に検討することや利用者への個別プログラムの開発が研究課題と考えられる。

キーワード：介護保険制度、文献の傾向、デイサービス、デイケア

1. まえがき

介護保険制度の目的は、高齢者介護に関する「自立支援」「在宅重視」「介護予防」である。この制度は、保健・医療・福祉サービスを統合化した新しい社会保険方式の社会保障制度でもある¹⁾。この制度が施行されて 4 年を迎え、2005 年度は施行後 5 年目の見直しがなされている。介護保険事業状況報告によれば、要介護認定サービス利用者は、制度発足時の 2000 年と 2003 年の比較では、要支援が 91%、要介護 I が 115%と軽度介護の割合が増加し、施設サービスと同様に、在宅サービスが拡大して、通所介護は 93%の増加となっている²⁾。今回はこのような介護保険サービスの中で、似たようなサービスである³⁾が、その区別が不明瞭と思われる「デイサービス」と「デイケア」のサービス内容について、介護保険導入前後のサービスに関連する文献から検討する。

用語の定義：介護保険法の規定によると、居宅給付としての通所介護（デイサービス）は、老人デイサービスセンター等の施設において、入浴、食事の提供等日常生活上の世話、機能訓練を行うサービスとされている。これに対して、通所リハビリテーション（デイ・ケア）は、介護老人保健施設、病院等の施設において、理学療法、作業療法、その他必要なリハビリテーションを行うサービスとされている。

2. 研究目的

介護保険制度における在宅サービスを推進する「デイ

サービス」と「デイケア」に関する過去の文献から、各々の共通性と違いを明らかにして、今後の高齢者と家族支援の研究に必要な課題を検討する。

3. 研究方法

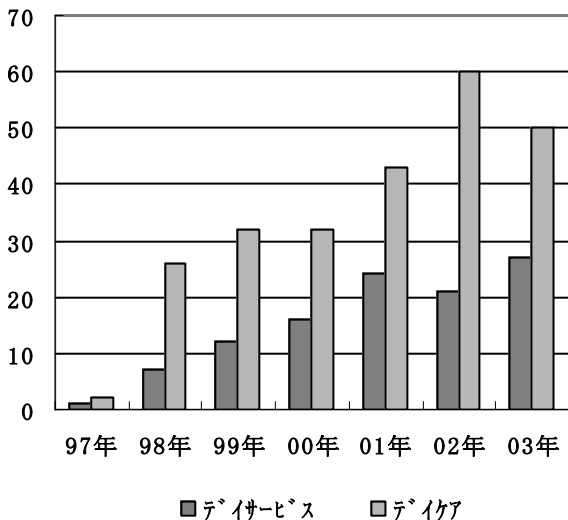
研究対象は、医中誌 WEB 版の 1990～2002 年に収録され、「デイケア」「デイサービス」のキーワードで検索された「原著」文献のみとする。分析は、検索文献 1 件 1 テーマとし、海外を対象とした文献を除外して、さらにそれらの内容を、「デイサービス」と「デイケア」とに分けて、年代毎に整理・分類し、KJ 法の手法でその特徴を明らかにする。

4. 結果と考察

1) 検索した文献総数は 353 件であった。「デイサービス」の文献は、1997 年 1 件、1998 年 7 件、1999 年 12 件、2000 年 16 件、2001 年 24 件、2002 年 21 件、2003 年 27 件と、年々増加傾向を示し、計 108 件 (30.6%) であった。「デイケア」の文献は、1997 年 2 件、1998 年 26 件、1999 年 32 件、2000 年 32 件、2001 年 43 件、2002 年 60 件、2003 年 50 件と同様に年毎に増加傾向を示し、計 245 件 (69.4%) であった。文献の増加数は、どの年も「デイケア」の方が「デイサービス」より多かった。また、「デイケア」の文献は、「デイサービス」の文献に比較して約 2 倍多かった (表 1)。これは、「デイケア」に関する論文が、特に、介護保険制度実施以前は、精神科領域の文献が多かった

ことから、歴史的に、精神科における診療の一部として実施されてきており、介護保険制度導入以降、痴呆（認知）症等の高齢者の介護目的としての「デイケア」が加わったことを示していると考えられる。

表1. 「デイサービス」と「デイケア」の文献数（件）



2) 「デイサービス」と「デイケア」の内容から取り出された特徴は次のとおりであった。

①活動内容：「デイサービス」では、音楽療法⁴⁾、コラーージュ、箱庭療法等の心理的療法、調理等のような日常生活におけるレクリエーション的活動を介護者の支援のもとに行う他、清潔・食事・排泄等の生活援助、機能訓練が行われていた。「デイケア」では、音楽療法、回想法、動物療法、動物ロボットによる活動、ユーモアセラピー、付け句遊び、集団式町作り画法のような心理的精神療法、フォークダンスや運動・スポーツ等のレクリエーションの他、心理教育、自己健康管理のような教育活動、男性集団調理、作業療法、手浴療法、就学・就労援助、薬物療法が見られた。また、このような活動内容の組み合わせかたや活動プログラムに関する検討が多かった。「デイサービス」でも機能訓練の必要性が示されている文献はあったが、「デイケア」の方が、医学的治療や健康教育、疾病予防を目的としたサービスを記述している文献が多かった。つまり、「デイケア」は、介護保険制度前から診療の一貫としてこのサービスを行ってきており、医療者主体のリハビリテーション治療として介護保険制度以降も継続している。医師の指示に基づく介護サービスであることが、「デイサービス」と大きく異なる内容となっていると考える。事業の申請者は、「デイサービス」では法人で、老人福祉法上の届けが必要である。「デイケア」の申請者は、介護保健施設、病院、診療所であり、この点で、開設申請者の意識が反映しているものとも考えられる。

②サービスの評価と意義：「デイケア」「デイサービス」とともに実践しているサービスの評価はなされていた^{5) 6)}が、「デイケア」のほうが評価の論文は多かった。これは、医療者の場合、治療目的に行われる事業であるため、治療や活動前後の評価やそれに基づく意義を検討することが基本となって文献数が増えていると思われる。

③看護職の役割：「デイケア」も「デイサービス」の文献でも、看護職者が健康上の管理的役割を担っているとしていた。これは、どちらのサービスを行うにも、高齢者等のサービス導入については、健康状態の観察と医学的対応が必要であり、身体的リハビリテーションのように身体への負荷を前提とするサービスでなくても体調の変化しやすい要支援、要介護高齢者を対象とするサービスであるため、保健・医療の知識と技術を提供する役割があるものと考えられる。

④利用対象者の多様性とサービスの意義：「デイサービス」は、乳幼児・児童、身体障害者等介護保険以外の対象に関する論文があった。「デイケア」は、透析、アルコール依存症、統合失調症、痴呆（認知）症の他、病児、骨折治療後患者や筋ジストロフィー患者等の対象に関する論文があった。つまり「デイサービス」「デイケア」は、ともに介護保険適応以外の対象を含み、サービス対象者は多様であった。介護保険制度実施前までの「デイサービス」は、障害者（児）や高齢者、精神障害者等の社会福祉サービスとして実施されており、「デイケア」は、治療の継続的意味で行われていたと思われる。しかし、厚生労働省大臣官房統計情報部の介護給付費実態調査（2003年1月審査）では、「デイサービス」と「デイケア」は、要支援、要介護ⅠからⅣの要介護高齢者に利用されている²⁾。つまり、通所系サービスは、訪問看護、訪問介護、訪問入浴、訪問リハビリテーション等の訪問系サービスとは異なり、施設に通所することで、家族介護の負担を軽減し、高齢要介護者の閉じこもりの予防と社会的交流を促している。

在宅における閉じこもりという非社会性を持つ危険を回避して、健康な住民生活を支援するサービスとして大切と考える文献が認められた⁷⁾。在宅生活を営む子供や障害者、高齢者にとっては、家族以外の方々との人間関係を図ることが可能な場であり、社会につながる窓口の一つとなると考える。介護保険制度下で運営している施設経営者の経済的負担は多大であるが、「デイサービス」や「デイケア」は、このような役割と意義のあるサービスなのである。しかし、現在見直されているシステムの役割や意義が、これらの研究成果を十分に反映していくには、研究成果の体系化が必要と思われる。

⑤医療的処置の実状：在宅生活を続ける中で、酸素療法やインシュリン自己注射等の医療的処置を必要とする患者が、「デイサービス」および「デイケア」の利用をしていることを示す文献があった。これらの医療的療法については、患者の身体条件が安定しているためにどちらのサービスにも参加していると考えられる。しかし、医療者からの指導援助を受ける上では、「デイサービス」の提供者よりも医療者が多い「デイケア」サービスの方が、サービス前後の健康管理や急変時の対応を考慮すると、より安全ではないかと考えるが、この点に関する利用上の区別や基準はなく実施されている⁸⁾。介護保険制度が措置制度から、住民の自己決定と選択権を尊重する契約制度へと変化し、「デイサービス」「デイケア」も住民側の主体的選択にゆだねられるサービスのひとつになっていることが伺われる。これらのサービスは、利用者の日常生活の質向上へ充分に貢献をしているが、科学的根拠についての系統的整理がなされていないので、経済的根拠を優先させる今後の見直し政策に、過去の研究成果が活かされにくいと予測される。

⑥介護負担の軽減：「デイサービス」であれ「デイケア」であれ、介護を要する利用者が丸1日外出しているので、在宅で昼夜介護をしている者にとっての介護負担は軽減し、役立っているという報告が大半である。特に、痴呆（認知）症高齢者においては、「短期入所生活介護」「短期入所療養介護」ともに、その役割を担っていることが読み取れる。

⑦看護教育への貢献：「デイサービス」は、主に介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）において、「デイケア」は、介護老人保健施設（老人保健施設）や病院、診療所等で看護学生や福祉の学生等に利用されていることが、教員による論文から明らかにされている⁹⁾。学生は、加齢によって部分的に障害された側面をもちつつも、通所できる条件のある健康的な側面を持っている、在宅で生活する高齢者の自立への援助を通して、施設介護と在宅介護の中継点としての「デイサービス」や「デイケア」の重要性を学習する。比較的コミュニケーションのとりやすい高齢者が対象であり、学習しやすい条件がある。

⑧利用者の満足感・QOL、感染・転倒等障害要因、利用障害要因：「デイサービス」でも「デイケア」でも、利用者の利用満足度やQOLに関するプラス要因、感染・転倒などのマイナス要因は、同様にあることを示す文献が認められた。そして、「デイサービス」と「デイケア」の違いは、「デイケア」は、利用者の心身機能やかかわりの分析が多いこと、利用頻度、時間、ケア終了や終了後の継続ケアにまで言及する論文があったことである。

5. まとめ

「デイサービス」と「デイケア」の介護保険制度実施前後の原著論文の検索を行った結果、次のことが明らかとなった。

- 1) 「デイケア」の文献数は、「デイサービス」の文献数の2倍で、年々増加傾向を示している。
 - 2) 「デイサービス」と「デイケア」は、高齢要介護者の心身機能の維持・回復を図る機会や場を提供し、介護予防や自立支援として高齢社会を支えることを意味しており、介護保険制度の設立目的を満たす重要なサービスと考える。
 - 3) 「デイサービス」と「デイケア」の申請者の違いから、「デイサービス」は福祉施設の立場から心身機能への支援を基本とする趣味等のレクリエーション活動が活発になされており、「デイケア」は医療の立場を基本とする身体的リハビリテーションや健康支援活動がなされていた。
- 以上より、今後は、このような保健・医療・福祉サービスの有効性を系統的に検討すること¹⁰⁾およびサービスを利用する利用者個々に適したサービスプログラムを開発していくことが研究課題と考えられる。

文献

- 1) 岡本祐三：介護保険の教室「自立」と「支え合い」の新秩序, 60-132, PHP 新書、東京都, 2000.
- 2) 厚生労働省監修：厚生労働白書（平成15年度版）, 60-65, K/K ぎょうせい, 東京都, 2004.
- 3) 奥野茂代, 大西和子：老年看護学Ⅰ, 老年看護概論, 78-83, 廣川書店, 東京都, 2001.
- 4) 斉藤由美子：高齢者がストレス発散と自己表現する場としての通所介護施設の音楽療法, *Quality of Life Journal*, 3(1) : 72, 2002.
- 5) 筒井孝子：介護保険制度下の介護サービス評価に関する変化 痴呆性高齢者に提供された介護サービスと経年的変化, *厚生*の指標, 51(1) : 452-6104, 2004.
- 6) 水尻強志：通所ケアの効果, *総合リハビリテーション*, 30(9) : 799-804, 2002.
- 7) 河野あゆみ, 金川克子, 伴真由美, 北浜陽子, 松原悦子：地域高齢者における介護予防をめざした機能訓練事業の評価の試み, *日本公衆衛生雑誌*, 49(9) : 983-991, 2002.
- 8) 川手信友行, 水間正澄：在宅脳卒中患者の介護保険給付に関する調査, *昭和医学会雑誌*, 63(4) : 437-442, 2003.
- 9) 水口陽子, 田中キミ子：特別養護老人ホームにおける老人看護学実習の学習内容 実習記録の分析から, *老年看護学*, 5(1) : 131-139, 2000.
- 10) 佐橋克彦：わが国の介護サービスにおける準市場の形成とその特異性, *社会福祉学*, 42(2) : 139-149, 2002.